

# 18世紀中葉におけるフランス経済学の一動向

—— グルネーとフォルボネを中心として ——

米 田 昇 平

- I. 序
- II. 就労人口
- III. 就労のバランス
- IV. 結び

## I. 序

1750年代にはいって、フランス経済学界は最初の経済専門誌である *Journal oeconomique* の創刊（1751年）をはじめとして、各種の外国経済文献の翻訳等、きわだって活況を呈するようになる。甲論乙駁するこのにぎやかな舞台を陰で演出した中心人物の一人としてグルネー Vincint de Gournay（1712-1759）がいたことは、最近の津田教授の一連の労作を通じてようやく明らかにされつつある。<sup>(1)</sup> 当時フランス経済は、いちはやく市民社会を成立させ、「産業資本擁護の政策体系としての重商主義政策」のもとに躍進を続けるイギリス経済の側圧をいっそう切実に脅威として感じていた。国内的にも、産業資本の成立に関して言えばいまだ揺籃期にあるとは言え、はやくも17世紀の末にボワギュベール<sup>(2)</sup> が看破したところの国民経済レベルでの交換関係の全面的展開という事態の進捗する中で、しかしなお国民経済は既存の諸制度によって自在の活動を抑圧されていた。

こうした両面の問題状況を踏まえて、種々の絶対王政批判、あるいはその経済政策体系であるコルベルティスムへの批判が展開されることとなる。そしてこの段階において、その批判は産業資本と言わず広く生産力の解放を、つまり

イギリス経済に対する対抗的な生産力体系を備えた国民経済の樹立へ向けて、フランス経済をどのようにコントロールすべきかという論点をめぐって展開されるのである。グルネーにしてしかり、そしてグルネーの弟子でありグルネーの死後はフィジオクラシーの最大の論敵の一人として一家をなしていくフォルボネ François Véron-Duverger de Forbonnais (1722-1800)<sup>(3)</sup> にしてまたしかりである。彼らは力点の置き方、推論の体裁等、数々の相違をこえて共通して生産力視点を前面に押し出して反独占、反特権そして労働の自由を主張し、積極的に就労人口を増加させるための方途を色々と究明しようとする。就労人口の増加は生産力効果と有効需要創出効果の両面を通じて国民的富の増大に貢献するからである。そして、例えば大量の穀物の輸出によって輸出国で「90万の人々が養われ、就労機会を得るだろうが、これは他国の人々の犠牲のうえに行なわれ、……輸入国では90万の人々が生活に困難をきたすだろう」<sup>(4)</sup> という具合に、国際経済の現実就労機会の奪い合いであり、国内経済はこうした国際経済関係に密接なつながりをもつことを思えば、就労機会の拡大、就労人口の増加のためには、様々な政策的配慮が要請されねばならない。彼らは貨幣のもつ積極的機能に着目して、結果として伝統的な貿易バランス論を展開することになるのだが、その内実、背景は彼らに独自の、あるいはこの時代に独自の論理に従うものであったと言える。

18世紀中葉のフランス経済学者達はフランスの相対的後進性を強く自覚せざるをえなかった。最初に述べた当時の経済学界の活況も彼らの危機意識の現われであろう。<sup>(5)</sup> こうした中でグルネーとフォルボネを中心として展開される議論は、『経済表』の直前にあって一つのしかし有力な論潮を形作っていたのである。以下この論潮の意味するところを若干ながら明らかにしてみたい。<sup>(6)</sup>

注(1) グルネーはチャイルド Josias Child の *A New Discourse of Trade* (London, 1693) の仏訳出版 (1752年) にあたって詳細な『注解』*Remarques* をつけようとした。しかしこの *Remarques* の部分は結局印刷されず手稿のまま長らく眠ることとなった。津田教授は最近これを Saint-Brieuc の *Bibliothèque* で他の手稿とともに発見された。これによりようやく本格的なグルネー研究が可能になった訳だが筆者は大学院 (早稲田大学) で教授の授業を通じてこれらの文献に接し、あわせて

グルネーをめぐる多彩な人脈について数々の教えを受ける機会を得た。こうした機会を得てはじめて本稿になったことは言うまでもない。尚、当然のことながらグルネーに関する引用は教授が既に一部発表された以下の資料にあるものに限ってページ数を明示するにとどめた。津田内匠「Vincint de Gournay の未発表資料 (I-1)」『経済研究』第27巻, 第3号。「同上 (I-2)」第28巻, 第1号。「同上 (II)」第31巻第2号。Takumi Tuda (publié), *Matériaux inédits de Vincint de Gournay* (III)・(IV), Discussion Paper Series (Institute of Economic Reserch Hitotsu-bashi Univ.) (III) No. 51, Dec. 1981・(IV) No. 45, Mar. 1981. 他にも「自由放任 Laissez faire, laissez passer 論の原型——Marquis d'Argenson と Vincint de Gournay——」『経済研究』第30巻, 第3号参照。

- (2) ボワギュベール Pierre le Pesant de Boisguilbert (1646-1714) については次のものを参照。I. N. E. D., *Pierre de Boisguilbert et la naissance de l'économie politique*, 2 vols. (Paris, 1966). 米田昇平「ボワギュベールの社会的均衡の理論」『経済学研究年報』第20号。
- (3) フォルボネに関しては、本稿は彼の前期を代表する著述であると目される *Elémens de Commerce*, 2 vols. (Paris, 1754) をのみ分析の対象としている。筆者は本報第21号で「『商業要論』におけるフォルボネの保護主義」と題してこの書の分析を試みたが、本稿のフォルボネに関する部分は基本的にその分析を継承している。尚、テキストとして1755年版を使用した。
- (4) Forbonnais, *Ibid.*, I, p. 69.
- (5) グルネーがチャイルドを訳出した意図もこの危機意識にあった。フランスはかつてイギリスの手ごわい競争者であったが、主に金利の差がひらいたことにより今やフランスの劣勢は明らかであり、生活資料の一部をも彼らに依存するに到っている。その原因は他国民が真の交易原理にめざめていく一方で、フランスはこれについて頑迷固陋なままであったからであるとして、彼は交易の不利を克服する方法をチャイルドの交易原理に学ばねばならないと力説してやまない（「資料 I-1」223頁ほか）。
- (6) 尚本稿は、グルネー、フォルボネに加えて、明快な就労人口論を展開したブリュマール・ド・ダンジュール Plumard de Dangeul の次の文献もあわせて分析の対象とした。Plumard de Dangeul, *Remarque sur les avantages et les desavantages de la France et de la Grande-Bretagne* (Leyde, 1754). 本稿は第3版を使用した。グルネーを師匠とする彼らの人的交流及びこの時代の多彩な出版事情について以下のものを参照。George Weulersse, *Le mouvement physiocratique en France de 1750 à 1770*, 2vols. (Paris, 1910), I, pp. 23-32. 津田内匠「1750年代のフランス経済学の動き——“Economistes” 直前の Economistes——」Study Series (一橋大学社会科学古典資料センター), No. 1, March 1982.

## Ⅱ. 就 労 人 口

### Ⅱ－１ 富

「農業が人々を養いかつ就労させ、工業労働が自然の産物に諸々の形態を与えることによって人々の便宜を増やし、そして国家に対しその成員の就労手段を2倍に増やす。こうしてこれら2つの技術は相互に依存し合い、その絆の強さはもしそれが断ち切られれば必ずやお互い同士の完全化を妨げあい、従って社会からそれらの有用性の大部分を奪ってしまうことになるほどである」(Forbonnais, I, pp. 187-188)。更に言えば「各人が従事するあらゆる部門の職業は相互に依存関係にあり、同じ原理の作用によって動く」(Forbonnais, I, p. 157)。<sup>(1)</sup> こうしたあらゆる産業部門の相互依存性を基本的に支えるのは農業であることは言うまでもない。「土地の生み出す富は第一次的なものであり、全ての他の富の原因である」(Gournay「資料Ⅰ－1」223頁)。あるいは「社会はその土地の耕作によって扶養し、就労させることのできるだけの市民をもつであろう」(Forbonnais, I, p. 61)。

そして、富とはこうした産業間バランスに基づいて生産される有用な財のことであり、貨幣それ自体ではもはやないというのが彼らの共通した認識であった。「富は本質的に金・銀にあるのではなくて、土地および勤労の産物にある」(Gournay)。あるいは「2国の臣民の安楽さを比較しうるのはもはや貨幣量ではない。こうした比較は彼らの保有する貨幣額によって獲得しうる生活物資の質と量に基づいて行なわれるべきである」(Forbonnais, I, pp. 102-103)。農業を基本にしてあらゆる産業部門が相互連関的に有用な財を、つまり国民的富を産み出していくという国民経済の姿は、既にボワギューベールの立論の中に見られるところであり、明示的であれ暗示的であれ、18世紀の多くの論者が描いたイメージであった。<sup>(2)</sup> ここではそれに加えて商業(交易)の果たす役割がきわめて重視される。次節で述べるように彼らにとって商業(交易)は各経済単位間の単なる媒介物ではなく、各部門の相互的成長を推進すべきアクティブな役割を担っていた。

従って産業間バランスを安定的に維持し、かつ各部門の相互的成長をもたらすような経済活動こそが真に国家に有用であり、常にあらゆる経済活動、また経済政策はこの観点からその意義が評価されねばならない。こうした問題にとりわけ関心を抱いたブリュマール・ド・ダンジュールは、英・仏の経済を比較して、フランスの不利の原因の一つを、その人口構成の歪み及びそれを助長する制度と風潮に求めた。つまり国家にとって最も有用な耕作者、職人、製造業者、商人は全体としてその数が多くて多すぎることはないが、金融業者、聖職者、司法関係者、軍人はできるだけ少い方が望ましい。しかし現実にはフランスではそれらはあらゆる階層の人々の最大の野心の対象であり、前者の人々の減少を誘いながら増え続けてきた。彼は言う。「国家に有用な階層、つまり国家の中でそこに存在しなかった価値を生み出す階層は最も重荷をかけられ、かつ卑しめられている。そして国民は国家に対し寄与するところの最も少なく、（奢侈に流れて費用のかかる結婚生活を避けようとし、また結婚しても子供をつくろうとしないから）最も人口増加をとげにくい職業に就こうとする傾向にある」（Danqueul, p. 45）。グルネーも次のように述べている。「耕作者、労働者そして貿易商人がいかなる国家であれ、常にその真の柱でありかつ将来にわたってそうであろう」（「資料Ⅰ-2」83頁）。

また国富の増大には産業間バランスの円滑な運営に基づいて経済活動を拡大していくことが肝要であり、一般的利益はそこにあるのだから、これに反するような私的利益はこうした公益の観点から規制されねばならない。グルネーはチャイルドにならって「（会社の）個別的利益は常に一般的利益に従属せねばならない」と明言する。フォルボネも「有効な商業とそうでない商業がある。この点を明らかにするために、商人の利得と国家の利得とを区別せねばならない」（I, p.29）と述べている。例えば商人が国産品の消費を害するような外国商品を輸入すれば、その商人は潤うが、国家は代金、国産品の使用によって労働者が手に入れたはずの賃金など多くのものを失うであろう（I, pp.29-30）。ボワギューベールがはやくも言及し、その後のいわゆる古典派経済学が形成されていく上で、重要な論点となった「私的利益はおのずから一般的利益を形成する」

という観念は、彼らにとってにわかには賛同しがたい考え方であった。<sup>(3)</sup>

注(1) グルネーの場合、産業間バランスに関してフォルボネほど明示的ではないが、地主と商人の利害が対立しないという議論など、似たような議論が散見される。

(2) この点について André Marchal, *La conception de l'Economie nationale et des rapports internationaux chez les Mercantilistes français et chez leurs contemporains* (Paris, 1931) を参照。

(3) この問題は仲々微妙である。そもそも一般的利益の尊重は当然のことであって、問題はこの一般的利益が何に由来するかということである。彼らは個人の自由な経済行為を妨げる独占や特権などに有利を見出す私的利益を公益の観点から規制すべきであると述べて、公益はむしろ独占、特権を排して自由を確立することにあると主張する。しかしその上でこうした私的利益の競争的自由が自ずから一般的利益を形成するかどうかという点になると微妙である。確かに彼らは後で述べるように「計算の精神」ということを言い、経済活動を自由にして各人の私利の追求に任せれば、競争原理を通じて高い生産性が得られ、また必ずしも無秩序に陥らないと考えているが、しかしそれは一般的なものではなく、常にフランスの遅れた立場を意識せざるをえなかった彼らは、問題が対外的関係に及ぶ時、身を屈して用心を怠らない。つまり理念的な競争的自由の効果と、現実的な対外的観点からする保護と干渉の効果への配慮がいたるところで錯綜している。競争的自由といえども場合によっては必ずしも公益にかなうとは限らないのである。いずれにせよ古典派的な調和論的ヴィジョンは彼らの論理に貫徹し得ない。

## II-2 販路と奢侈

ところで産業間バランスの安定的維持、あるいは各部門の均衡的成長をもたらす上で、重要な指標は販路である。販路の確保と拡大こそが国民経済の安定と成長のための必要条件である。この点に関してフォルボネの論理は単純かつ明快である。「耕作によって耕作者が引き続いてその仕事を行うことができるだけの、また自分の労苦を償うだけの利益を手に入れることが必要である」

(I, p. 79) が、販路が不足すればこうした生産価格、あるいは適正価格の実現が妨げられることになる。生産価格にも達しないような穀物の低価は、供給者の数の方が需要者よりも多いせいであるから、例えば各地に中規模の数多くの穀倉を設けて需要者の数を増やすことが必要である。そうすれば耕作者に対し、豊作の年に通常の消費分に加えてかなりの農産物の販路を提供することができ

る。従ってまた場合によっては穀物の輸出も行なわれるべきであるし、同じ理由から時として原料の輸出も認められるべきである (I, pp. 83-94, 157-158)。一定の販路の確保は再生産を可能にするための必須の条件なのである。

更に販路の拡大は生産活動の拡大を保証する。その際重要なのは商品が安価であるということである。勿論「農産物の安価と、耕作を放棄させその結果製造業に害を与えるような低価とを十分に区別せねばならない」(I, p. 173) が、上等の商品を買えるのは消費者全体の中では相対的に数の少ない金持ちだけであるから、できるだけ多くの消費者を動員するためには商品はできるだけ安くあらねばならない。各国民、各階層の多種多様な嗜好に応える商品を提供することが肝要であって、場合によっては品質の優劣は問題ではない。例えば職人の妻はシリア産の布を10リーブルなら買わないが、7リーブルなら買おうとする。彼女にとって品質は問題ではない。金持ちの婦人のようにみた目が美しく着られればそれで満足なのだから (I, pp. 156-157)。グルネーも次のように述べている。品質が多少劣ってもそれが消費される限りは有用なのであって、本当に劣悪ならば消費されないし、それを作った製造業者も消費されないということにおいて処罰されるのである。従って「世界の交易の支配者となる手段は、その国で最良の商品と同様に最悪の商品を作ることである」(「資料I—2」72頁)。フォルボネは言う。「社会にとっての有利は明らかに多くの人々に販売することであり、そうであればあるほど多くの物財が用いられ、多くの人員が雇用されることになる」(I, p. 156)。販路の確保と拡大のためには「できるだけ多くの人に販売すること」つまり広汎な大衆消費を引き起こさねばならないのである。人々が必ず使わねばならないような必要度の最も高い財は、個々の価値はそれほど大きくなくても消費の繰返しによって価値の総額は非常に大きくなる。それによって多くの職人が就業し、そして大量の土地の産物が使用されることとなる (Forbonnais I, pp. 148-149)。従って消費性向の高い一般大衆の消費購買力を喚起し、かつ増大させるような方向が是非とも必要なのである。<sup>(1)</sup>

グルネーはこのことを、国家に有益なのは大利潤・小数の交易ではなく、小利潤・大量の交易であるという形で表現している。国民全般に有利な交易を確

立するためには、特定の商人や都市などの個別的利益に腐心するのをやめねばならない。というのは国民がおおいに利益を得るのは、個々の商人が少ない利益に甘んじる場合であるからである。ダンジュールも同様のことを述べている。フランスにおける高金利は国家に無用の人々、つまり無為の金利生活者を増加させ商人の数を減少させる。これにより商業は少数の手に握られてしまい、外国貿易は独占的となり、大利潤をめざして取るに足りない利潤など無視するようになる。これは消費、貧民の雇用、人口の増加に最も反する原理である (pp. 68, 214)。結局、生産と消費の相互的拡大のためにはできるだけ多くの人々を動員せねばならず、それには小利潤・大量交易の方が有効なのである。

この観点は彼らの奢侈論にも通じる。フォルボネは次のような奢侈論を展開している。奢侈は言わばより快適な生活を求める人間の本性にかかわっており、人々に生活水準の向上をめざして競争心を発揮させる原因であって、「国家の力と繁栄は、他人と同じ生活の便宜をもちたいという想いをかきたてる人がどれだけ多くいるかにかかっている」(II, pp. 137-138) ほどである。奢侈は技術開発、生産の心理的な刺激要因なのである。そして富裕者の奢侈は貧しい人々に職を与え彼らの生活を豊かにする。例えば貿易商人を通じてあらゆる階層間に富の分配が行なわれ、この分配が繰り返されていく中で、耕作者や職人はそれだけ多くの快適な生活の便宜を手に入れ、それによってまた無数のほかの人々に同じ生活の便を享受する力を増やしていくのである (II, pp. 138-139)。従って「貿易商人の財産がどんな莫大なものになろうとも、それによって生活資料を保証される何千もの家族に何ら影を落とすものではない」(II, p. 139)。そしてそもそも、能力に応じた不平等は当然のこととして、奢侈は各人の勤労次第ですべての人々の手の届くところにある (II, p. 139)。このように、奢侈それ自体は悪いものではないが、しかしこうした奢侈は常に商業 Commerce に基づいたものでなければならない。そうでなければ「循環の自然的秩序が逆転し、様々な階層間の均衡が損なわれる」(II, p. 143)。奢侈の効果は一部の人に限られ、多くの人々の不満が奢侈にむけられることになるであろう (*Ibid.*)。

フォルボネはグルネーやダンジュールとは違って、必ずしも小利潤の意義を



強調しない。むしろ産業活動の中で主導的役割を果たす階層の致富あるいは奢侈は、国民経済の活況の原因であり結果であるとしてこれを賞揚しさえする。しかし上の叙述から知られるように、彼が言おうとしているのは結局、経済規模の拡大による全体的な生活水準の向上であって、商業に基づかない、つまり国民多数の生産活動に影響を及ぼさない奢侈は言わば非生産的奢侈として排斥される。従って奢侈について語り、その効用を説きながら彼の論じているのは全体的な消費水準の向上についてであり、その結果としての富裕者の奢侈もそれが国民経済全体における生産と消費の相互的拡大を保証するものであれば、何ら批難するにはあたらないのである。更に言えば奢侈と言いながら、彼は国民多数の勤労と外国貿易の重要性を論じているにすぎないのである。グルネーの場合は全体の論述を通じてそれと知られるだけだが、同じように小利潤の立場からダンジュールが、豪華な廷宅を設け、豪華な調度品を備えつけ、また各種の従僕をありあまるほどに雇い入れるような富裕者の奢侈は、価値を生み出す唯一の源泉である耕作と商業の繁栄を保証するような消費とは言えず、かえってそれらから資金を奪ってますます衰退させると述べて、こうした過度の奢侈と富の遍在を批難する時 (pp. 63-64)、フォルボネの立場と本質的にはかわらないのである。

注(1) ダンジュールも「2万リーブルの定期金を得ている家庭は1000リーブルの定期金を得ている20世帯ほどには、例えばぶどう酒を消費しないだろう」(pp. 59-60)と述べている。

### II-3 就労人口と就労の自由

以上のように、フランスがイギリスに伍した生産力を身につけ、経済発展をとげるためには、生産力それ自体の飛躍は当然のこととして、同時に販路の確保と拡大、つまり一般大衆の消費購買力の増大（あるいは全体的消費水準の向上）がそれに伴わねばならない。こうした生産と消費の相互的拡大のためには、小利潤・大量交易の論理がそうであったように、産業間バランスの中で有用な財を生産する人々を増やすこと、つまりはできるだけ多くの人々を有用な

職に就かせることが必要であった。それによって生産力それ自体が拡大されるとともに、彼らの生み出す有効需要は生産力に捌口を提供し続け、両者が相伴ってフランス経済を発展に導くのである。グルネー、フォルボネ（そしてダンジュール）の諸々の主張はある程度こうした「就労人口の増加」の一点に集約できるのである。グルネーは「人口増加に資するものは全てその王国の改善に資する」とのチャイルドの命題を受けて、「（あらゆる制度、設立、計画は）それが人口増加を導くようなものであれば、国王及び国家に有益であり……（その逆であれば）有害である」と述べている。フォルボネも次のように言う。「商業の効果は国家にそれが享受し得るだけの力をつけさせることである。こうした力は政治的富、つまり実質的富と相対的富がその国に引き寄せる人口にある」（I, pp. 28-29）。

従って様々な原因によって有用な職に就くことを阻止された多くの無為、徒食の人々を就労させること、労働条件の劣悪さによる人口の流出を防ぐこと、そして積極的に外国人労働者の流入を策すことなどによって産業人口の増大を計らねばならない。グルネーは言う。平時における外国への人口の流出は、戦争における人員の損失よりも深刻である。というのはそれはただちに他国の強化に直結するからである。こうした害悪を阻止するには、貿易商人、製造業者、耕作者、労働者、水夫といった国力の源泉である人々に外国と同様の居心地を保証してやらねばならない（Gournay）。また、外国人労働者の帰化、あるいは流入による産業人口の増大は労働力を安価にし、競争を促進する（Dangeul, pp. 9-10）。「一人の競争者は一つの販路 *un débouché* である」（Gournay）ことを思えば、これが国民経済に及ぼす有益な効果は言うまでもない。多大な費用をかけて植民地を建設する目的も、ひとつには植民地との交易を通じて本国でより多くの人々に就労機会が与えられるからである（Forbonnais, I, p. 222）。

以上から明らかなように、彼らは人口が国力の源泉であるという伝統的な多人口主義を踏襲しているものの、この場合の人口は国富の生産にかかわる勤労者のそれでなければならなかった。そうでなければそもそも人口増加など望み得ない。つまり彼らの認識によれば、勤労者が増加することによってのみ、生

産活動と有効需要の相互的拡大を通じて新たな雇用機会が次々に生み出されていくことができるからである。そして逆に生産活動と有効需要の相互的拡大が勤労者の増加の条件であることを思えば、結局これら3つは不可分の関係にあり、あらゆる産業部門の相互依存性の中で、それぞれが原因となり結果となってフランス経済の生産力を高めていくのである。

さて、現実には生産活動を阻害し、消費水準を低レベルに押しとどめ、そして結局就労人口の増加を阻む数多くの要因が存在している。論者によって力点は異なるが、彼らは商・工業を軽視あるいは蔑視する風潮、<sup>(1)</sup> 財産の不平等、<sup>(2)</sup> 富や人口の都市集中、税制の不備、祝祭日の多さ、高金利、独占と特権など数多くの阻害要因を挙げているが、ここでは高金利と独占・特権について簡単に見ておこう。

グルネーのチャイルド訳出の意図の多くは、フランスが高金利ゆえにいかに不利を蒙っているかを論証することにある。高金利はそれだけ国内産業の資金調達力を弱め、あるいは製品をその分高価にし、対外交易上の不利を招く。そして高利での投資に魅せられて土地の売却が進み土地が荒廃すると同時に、海外の投資家の餌食になって、彼らへの利子の形で貨幣が流出していく。そもそも英・仏の貿易上の立場の逆転をもたらした主因は金利の差がひらいたことにあった。「我々は貨幣が我が国よりもずっと安価な国民と競って利益を得ることなどできょうか」(Gournay)。<sup>(3)</sup> また独占と特権に対する憎悪も彼らに共通のものである。独占と特権、あるいはこれを保証する諸規制 *règlements* は、勤労者の増加を阻み、生産力の拡大を妨げる直接的な障壁である。それは他国からの労働者の流入を阻止し、国民の就労機会を規制する。そしてなにより競争を阻害することによって、技術の完成(産業の洗練)や製品(運賃、賃金など)の安価を困難にし、植民地を含めてフランス経済全般を弱体化し、他国の跳梁を許してしまう。グルネーによれば、特権は公益を損って個別的利益に奉仕するにすぎず、「100項目の諸規制は……すなわち労働者を破滅させる100の手段」である。コルベールの時代には必要であったこれらの制度も、他国が就労の自由によって生産力の拡大をとげている現在の状況下にあっては、全く現実的で

はないのである（Gournay「資料Ⅰ－２」74頁ほか）。<sup>(4)</sup>

従って他国並みの労働条件を提供すること、つまり就労の自由を保証してやるのが、労働力の海外流出を防ぎ、かつ労働力の流入を促す上で欠かせないのである。そして勿論、就労の自由は積極的に就労機会を拡大し、就労人口を増加させる。また勤労者の増加は彼らの競争を促し、「一人の競争者は一つの販路」であったから、需要、供給両面での競争が刺激されることになり、これによって生産価格の維持、また対外競争力を備えた安価で多種多様な製品の製造が可能となる。こうした意味で自由は就労の自由にとどまらず、国内産業の自在の活動を保証するための全般的な自由でなければならない。内国関税や通行税は撤廃されるべきであるし、全ての港に交易の自由と艀装の自由を与えるべきなのである。自由と競争は無秩序をもたらすとの議論に対してはグルネーは次のように言う。「規制」の存在しない国の製造業者は確かに好きだけ粗悪品を作ることでもできるが、しかし彼らは消費者の信用を得るには最善を尽くしてすぐれた製品を作らねばならないことを承知しており、この点で規制で定められた水準ぎりぎりの製品を作ればよい場合に比べて製品の改良は促進されやすい。また小麦取引の自由は飢饉の場合でも有効に作用し、極端な高価を防ぐ。「独占を作り出すのは共謀であるが、自由は共謀を阻止することによって独占を阻止するのである。」交易や製造が自由であれば、自ずから当事者間に不正防止の自浄原理が働くのである（「資料Ⅰ－２」75頁ほか）。<sup>(5)</sup>

注(1) 実業の尊重は前に述べた彼らの職業観に由来しているが、これと関連して彼らは「計算の精神 *l'esprit de calcul*」に基づく経済活動を推奨している（Gournay 及び Forbonnais, I, p. 88）。

(2) フォルボネは貨幣の分配が平等であればあるほど、貨幣の流通は自然の秩序に近づき、消費水準は高まる（II, p. 68）が、逆に富裕者による貨幣の蓄蔵は消費水準を低め、そして利子率を高める（II, pp. 58-60）と述べている。他にも Dangeul, pp. 17, 58-60 参照。

(3) また Forbonnais, I, pp. 57, 206. II, p. 66. Dangeul, pp. 64-71 を参照。

(4) また Forbonnais, I, p. 182-184. Dangeul, pp. 26-27, 212-217 を参照。グルネーは独占、特権をほとんど全否定するような激しい口調でこれを批難しているが、フォルボネは未熟な産業部門などの場合、一種の緩和された排他的特権を与えるの

もやむをえず、また徒弟制度そのものも労働者の熟練のためには全く無意味という訳ではないと考えており、より柔軟である (Forbonnais, I, pp. 171, 182)。

(5) フォルボネについては I, pp. 54-59. を参照。

### Ⅲ. 就労のバランス

以上のように彼らはフランスの遅れを取り戻し、生産力を高めるには、何より「勤労」の増加によらねばならないと考え、そのための方策を色々と究明しようとする。その際彼らは既に述べたように、競争の自由の原理を押し進める一方で、対外的観点からする保護と干渉の政策を推進しようとした。両者の微妙な融合こそ彼らに最も顕著な特徴であるとさえ言える。では彼らの目に映った国際経済の現実はどうのようなものであったか。序でも触れたように、それはある国家が利得する分は敵対国の実質的かつ相対的勢力を減少させ、逆に国家の失う分によって敵対国は力を増す(Forbonnais, I, pp. 208-209)というきわめて過酷な現実であった。従って例えばフランスが自国の船舶に支払う運賃は国民にとってゼロに等しいが、外国の船舶に支払う運賃は国民にとって純損である(Gournay)。こうした「数には数、力には力をもってせねばならない」(Gournay)環境の中で各国が争っているものはもはや単純な「貿易差額」ではない。対外的競争の目的は、土地及び勤労の産物を外国に提供し、外国人の貨幣によって、人口、面積などを勘案して他国と同じだけの人員を就業させることにある(Forbonnais, I, p. 55)。つまり隣国と富のバランスを争っているように、隣国と人的なバランスを争って、できるだけ多くの人口を引き寄せることほど栄えることはない(Gournay)。従って、国際経済の舞台で演じられているのは就労のバランス、つまり雇用の拡大をめぐる綱引きのごときものなのである。「勤労」のもつ重要性に対する認識と、国際経済を争奪の場とみる認識が結びつけば、この帰結が導かれるのは当然のことである。またフォルボネは「2国間での工業労働における進歩の優位は、国内のものであれ、国外のものであれ、その国の消費の優位に依存する」(I, p. 147)と述べて、就労のバランス論を拡張して言えば消費バランス論を展開している。彼は「外国人の工業労働の成果を他国よりも少なく消費すること」(I, p. 148)、つまり生活必需物資の自給体

制を整えながら、積極的な輸出によって他国の消費を奪えと説いている。

以上により、外国貿易の格別の重要性は明らかである。もともと彼らは商業の果たす役割を高く評価した。フォルボネにとって商業 *commerce* とは単なる媒介項ではなく、全産業部門を包括しかつ産業間バランスを積極的に主導すべき重要な役割を担っており、商業的経済観とでも言うべきものが彼の著述の全編を貫いている (I, pp. 1-3)。そしてこの商業が死活的使命を帯びるのが外国貿易の場合なのである。遅れた国では自然の発露による勤労の自律的發展をいつまでも待っている訳にはいかず (勿論彼らにはそうした論理はない)、「遅れ」の原因を取り除きつつ、言わば勤労を人為的に促進してでも生産力の拡充に努めねばならない。ここに商業が主導性を発揮すべき理由が生まれる。また世界経済は否応なく相互依存関係、というよりは一国の繁栄は他国の窮乏であることを思えば、むしろ支配-従属関係を強めており、相対的「遅れ」を招いた原因も交易における不利を通じてであったから、また「遅れ」を取り戻すのも不利の克服を通じてでなければならない。従って交易はまさに国家的事業 (Gournay) であるに違いないのである。<sup>(1)</sup>

前節で述べた、産業間バランスを安定的に維持し、かつ各部門の均衡的成長をもたらすような経済活動、つまり競争的自由の原理に基づく勤労大衆の経済活動は、交易の不利を克服するための慎重な配慮と連動したものでなければならなかった。ここに政策当局の重要性と当局による保護・干渉政策の必然性が導かれる。フォルボネは言う。「政治的利益が商業に加える制限を拘束と呼ぶことはできない。こうした自由はきわめてしばしばひきあいに出され、しかもめったに理解されていないのだが、それは納得のいく社会の一般的利益が許すだけの商業を容易に行うことにあるにすぎない」 (Forbonnais, I, p. 48)。従って例えば植民地での経済活動は常に本国の利益に従属したものでなければならず、そこから逸脱するような活動は干渉の対象となる (Gournay 及び Forbonnais, I, pp. 222-223)。また「進歩の不均等性」 (Forbonnais, I, p. 147) の故に、完全な平等を確立しようとする条約は常にフランスの不利を招かざるをえない (Gournay)。国内産業の条件が違う限り、互惠的条約などあり得ないのである。

そして国内産業の「遅れ」も交易の不利を通じて強化されたことを思えば、こうした生産力の相対的未熟さと交易の不利との因果的悪循環を断ち切るためには「デンマーク人やスウェーデン人が築いたのと同じ城壁」(Gournay)を築いて、国内産業を保護することが必要なのである。ここに海運法をはじめとする数々の保護政策が要請されることになる。<sup>(2)</sup> これにより政策当局の重要性も明らかであろう。<sup>(3)</sup>

注(1) 彼らは「貿易戦争」の中で、大艦隊、大海軍をもって他国を牽制すべきことをすら説いている (Gournay, Forbonnais, I, p. 215)。

(2) グルネーは、国内における競争の自由の主張に関してより強硬であったように、海運法、関税政策等の保護政策の主張に関してもまさに「城壁」を築くべしとより強硬である。しかしフォルボネは、あらゆる国が交易の利益について十分に開明的な今日、そのような厳しい措置は報復を招いて結局双方が自滅してしまう恐れがあるとして、この点、対外的競争力を身につけ自立が可能になるまでという留保つきで、輸出奨励金や産業助成金を与える方がすぐれた手段であると述べている (Forbonnais, I, pp. 150-151, 184-186, 194-195 II, pp. 231-232)。

(3) 政策当局はできるだけ暴力的、強制的手段に頼らず、自由と保護の適当な結合によって全般的バランスを有利にかえるための政策を主導すべき役割を担わされているのである。尚グルネーは交易を全体として統轄する機関としてイギリスのような交易会談 *Conseil ou bureau du commerce* の設置を提唱している。

#### IV. 結 び

彼らは抑圧された潜在的生産力の解放にとどまらず、積極的な生産力の創出を考えたが、こうした生産力の拡充は就労人口の増加によってのみ可能であった。勤労大衆による経済活動の拡大によってはじめて生産と消費の相互的拡大が保証されるのである。そして「国内商業の大部分が国際貿易に依存して」(Gournay)おり、しかも国際経済の舞台は争奪の場であるとすれば、就労人口の増加は他国との攻めあいの中で、交易の不利を克服し、従属関係を覆えすための数々の努力を通じて実現されるにすぎない。彼らは産業の自律的發展を期待すべき余裕はなかったし、またそうした論理をもたなかったのである。勿論、資本蓄積に基づく拡大再生産の論理など望むべくもない。そしていよいよ

『経済表』が見事な再生産論を提示するにいたって、商業や貨幣はかつての輝きを失い、単に生産の従属的機能を果たすにすぎないものとされ、就労人口の増加はもはや第一次的要請ではなくなってしまう。国際貿易は「綱引き」を必要とせず、保護主義はかえって富の再生産を阻害する要因であった。こうしてフィジオクラシーのまばゆい光の影として彼らは主流の座をあけ渡すことになる。フィジオクラートの論敵として尚一線で論陣を張り続けたフォルボネを別として、「1750年代のフランス経済学の動きの結末はケネーの華々しい登場とグルネーのひそやかな退場でもあった」<sup>(1)</sup>のである。

しかし、こうしたフィジオクラートの自由貿易論に基づいてイギリスとの間で結ばれた「イーデン条約」（1786年）によって、フランス産業は大打撃を蒙り、彼らの自由貿易論の非現実性が露呈されるに及んで、グルネーやフォルボネの唱えた生産力拡充政策は再び日の目を見ることとなり、革命政府の経済政策の中に、その精神が受け継がれていく。ヒューム David Hume が粗略ながらも国際分業の利を説き、「交易上のしつと」のナンセンスを論じている時に、<sup>(2)</sup>グルネーが同じイギリスの80年前の『新交易論』に、フランスの「遅れ」を克服するための指針を求めねばならないと感じたその精神は、フィジオクラシーの明晰な論理によって克服されはしなかったということなのであろう。18世紀フランス経済学の特異な性格の一端がここにうかがわれるのである。<sup>(3)</sup>

注(1) 津田「1750年代のフランス経済学の動き」5頁。

(2) David Hume, *Political Discourses* (Edinburgh, 1752). 田中敏弘訳『経済論集』（東大出版、1967年）参照。

(3) 本稿は『経済表』の直前に現われたグルネー、フォルボネ（そしてダンジュール）の論稿を通じて、生産力の拡充のためには就労人口の増加によらねばならないこと、そして国内産業と外国貿易は一体不離の関係にあり、しかも国際経済は争奪の場であるからには、就労人口の増加も現実の交易の不利を克服する努力を通じて実現しなければならないこと、こうした彼らに共通する論点の概略を示したにすぎない。例えば彼らの貿易バランス論は、実質的には労働バランス論的な傾きをもっているとは言え、貨幣の生産的機能に対する着目と相俟って到底無視できない重要な論点であるが、紙幅の都合もあり他の様々な議論とともに省略せざるをえなかった。他にも残された多くの問題とともに別稿にゆずりたい。



1982.9.30 脱稿

(後期課程第3年度生・理論経済学 柏崎利之輔教授研究指導)